
刊行にあたって

国立歴史民俗博物館（以下歴博と略す）では、1993年の10月から11月にかけて、開館10周年を記念して企画展示「装飾古墳の世界」を朝日新聞社との共催で開催した。この展覧会は、文化庁が日本画家の日下八光氏に依頼して作成した日本各地の装飾古墳の壁画の模写が歴博に移管されていたこと、また日本絵画史の一頁を飾る力強い古墳壁画を多くの人びとに示すとともに、古代の日本列島に住んだ人びとの来世観や世界観にもふれていただければとの考えから企画したものであった。本書は、この展覧会の企画立案のために組織した展示プロジェクトチームのメンバーの研究成果報告書である。

歴博では、常設の総合展示はもとより、すべての企画展示の企画に際して、館内外の研究者からなる展示プロジェクトチームを組織して展示案の作成にあたり、このチームが展示の学問的内容については責任を負うこととしている。もとより具体的な展示企画の立案にあたるのが目的であるから、研究それ自体を目的とする通常の共同研究などとは異なるが、そのテーマに関する研究の達成点や残された課題を検討し、その上にたって新しい何ものかを付け加えられる展示となるよう議論を深めている。この「装飾古墳の世界」の展示プロジェクトチームも、日本考古学・東アジア考古学・日本古代史・東アジア古代史・民俗学・民族学・神話学・宗教学・保存科学などの専門家からなる18名のメンバーが、1990年から3年間にわたって現地調査を含む10回ほどの研究会を重ね、装飾古墳にかかわるさまざまな問題を議論した。

もちろん展示プロジェクトチームの研究成果は展示に反映されたわけであるが、メンバーの研究の中には必ずしも展示に示せなかったものや、是非とも活字化して学界に提示すべきであると考えられた成果も少なくない。このためチームのメンバーの方々と協議し、メンバーのうち研究報告の執筆を了解下さった方々の報告を集めて『国立歴史民俗博物館研究報告』の一冊として刊行することにしたものである。執筆を承諾いただいた方のうち、ご多忙のため原稿を頂戴できなかった方もおられるが、展覧会開催後すでに相当の期間を経過しているので、一応の区切りをつける意味で刊行に踏み切ったものである。メンバーの中には早くから原稿を提出いただいていた方もいるが、刊行が遅れたのはすべて代表者の責任であり、深くお詫び申し上げます。

このような経緯からもお分かりいただけるように、この展示プロジェクト研究は必ずしも日本の装飾古墳を体系的に追究したものではない。しかし、それぞれ興味深い研究成果や、このプロジェクトに参加される中で考えられたことを執筆いただいております。今後の装飾古墳の研究に貴重な示唆を与えるものが少なくないと考えている。あらためて、展示プロジェクトチームのメンバーの方々や研究協力者の方々、また多忙な中報告を執筆いただいた方々に厚くお礼申し上げます。英文サマリーの翻訳は、ハーヴァード大学ピーボディ博物館の佐々木憲一さんをお願いした。正確な訳文

の作成にご努力いただいた佐々木さんにも厚くお礼申しあげたい。

なお、この企画展は1993年に歴博で開催したあと、1994年には四日市市立博物館、福岡市博物館、神戸市立博物館、宮崎県総合博物館の各館で開催され、歴博会場だけで約8万人、他の会場を合わせるとおよそ15万人の方々にご覧いただくことができ、成功裡に終了することができた。共催いただいた朝日新聞社や各共催館、さらにご協力いただいた多くの方々に、この機会にあらためてお礼申し上げておきたい。

1998年9月21日

「装飾古墳の世界」展示プロジェクトチーム代表者

白石太一郎

[展示プロジェクトチーム]

青柳正規・東 潮・阿部義平・石山 勲・大林太良・岡田精司・設楽博己・白石太一郎・杉山
晋作・高木正文・玉利 勲・永嶋正春・西嶋定生・橋本裕之・春成秀爾・平川 南・山折哲雄
・和田 萃

[展示協力者]

川崎純徳・佐原 真・永島暉臣慎・福島雅儀
